



白い結晶と
彼女

卯月京

序章

彼女はいつも、白い結晶の入った小瓶を持ち歩いていた。

中身を尋ねると「これは永遠を得られないとわかった時に役立つの」と言っていた。

彼女は瞳と言って、長い髪が特徴的で、眼鏡をしている、白肌のとても、おとなしい子だった

。

僕も背は高いが、それに近いぐらいの背も高く綺麗な子だった。

それでも、瞳はクラスでも目立たず、友達も少ない方だった。

僕とは、中学生の時2年間付き合っていた。

思えば、はじめて付き合ったと言えるような女の子だった。

もちろん、付き合いと言っても、手もつないだことがなく、今思えば付き合っていたと言えるかも定かでもない。

ただ、彼女にとって、僕はただ一人、話しをできる男の子だったようだ。

しかし、その恋もある突然終わりを告げた。彼女の自殺により。

そう、彼女の持ち歩いていた小瓶の中身は、青酸カリで、それを服毒して、彼女は僕にとって永遠に忘れられない人となってしまった。

ただ、その時、僕は彼女のことをなにも分かっていなかった。

わかったのは、数年後のことだった。

第一章

瞳と始めて出会ったのは、中学1年の冬だった。

僕は、図書委員をしていた。

小さい頃から、転校が多く友達が少ないせいか、本が好きで、一人になることが多く、よく学校でも本を読んでいたら、いつの間にか図書委員にされていた。

本に触れられる機会の多い図書委員は嫌いじゃなかった。

その日は貸し出し係だったので、図書室のカウンターで図書カードを整理していた。

この学校の図書室は利用者が少ないせいか、いつもがらんとしている。

そのとき、瞳が夏目漱石の「こころ」をカウンターに出して来た。

僕も、漱石は好きだったので、普段の貸し出しの時なんかは黙って作業をするが、つい彼女に声を掛けた。

「これ、いい本ですよ、最近はやいのばかりなのに、珍しいね」

「私も漱石は好きです、でもライトノベルとかも読みますよ」

瞳が小声で返答してきた。

「でも、うれしいです、最近はや古典を借りる人が少ないので」

「ありがとうございます」

瞳は顔を真っ赤にしながらかけてくれた。

図書室は、誰もいなかったもので、その後も二人きりで、本談義を小一時間ばかりしていただろうか、そのうち、日も暮れ始めて下校のベルが鳴り始めた。

「そろそろ閉館ですね」

「そろそろ、私も帰ります、お話楽しかったです」

と話し、その日は別れた。

瞳の第一印象はとにかくおとなしい子で、何を考えているかもよくわからなかった。どこか儂げなところもあった。

でも、その美しさに、会った瞬間に一目ぼれしていたのかもしれない。

数日後、帰宅途中に新刊の文庫を買おうと、書店に寄った。

探していた本を手にとろうとすると、柔らかい手と触れ合った。

お互いに見つめあい、瞳と気付いた途端に、僕は照れてながら。

「どうぞ」

「いや、図書委員さんこそ、どうぞ」

「よく見ると2冊ありますね」

二人に笑みがこぼれ、その途端に打ち解けあった。

二人でレジに行き、その後はどちらともなくファーストフードに行こうということになり、二人で行った。

「この作家の新作、すごく待っていたんですよ、前の良かったけど、今回のも期待していて」

僕は、コーヒーを飲みながら熱く語っていた。

「図書委員さんが、こういうジャンル読むなんて意外ですね」

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったですね」

「私は、平山瞳。目の瞳です」

「僕は、中沢啓太」

「いい名前ですね」

「中沢さんこそ」

とりあえず自己紹介をした。その後は、二人の好きな作家の話しなどになり、気が付いたら、もう日が沈んでいた。

その日の夜は、瞳とあんなに楽しい時間を過ごせたことに興奮して寝られないでいた。

もっと、瞳のことを知りたいと思い始めていた。

その思いは、二人と持っていたようだ。

一ヶ月もしないうちに、僕が図書当番の時は、図書室で話しをするようになり、家の方向が一緒とわかると一緒に帰るような仲になっていった。

瞳も僕も部活に入っていなかったのも、必然的に会う時間も多くなった。

しかし、遊園地や映画館へのデートに誘っても断られるばかりだった。

「私、人の多いところは嫌いな」

結局、デートとして行けたのは市内の大きな図書館と書店ぐらいだった。

図書館へ行くと、瞳は目を輝かせていた。

「あ、あんな本もある。あれもまだ読んでいない」

文学談義もよくしていた。

と言っても、中学生レベルのたわいもないものだった。

「あの作書の文体が好きなんだ」

「私も」

「でも、あれはアイデアがつまんないよね」

「そう、あれはあれでいいじゃない」

その程度だ。

でも、そういうことを語り合える唯一の人が瞳だった。

お互いの部屋を行き来することもあった。

瞳の部屋は本棚を中心にデザインされていた。それ以外のインテリアはシックな感じだった。

それでも、女の子らしくぬいぐるみなんかもベッドにあった。

瞳の部屋へ行くと、瞳は本棚から様々な本を出し、いろいろと本に関する思い出を僕に語りだした。

逆に僕の家に来ると、本棚ばかりを眺め、自分の家にはない本があると、貸してくれとせがまれた。

珍しい本を見つけると、いつも笑顔で笑っていた。

「啓太君、こんなユーモアのある小説も読むんだ、以外な側面あるんだね」

ある時、瞳に聞いたことがある。

「僕も友達少ないけど、瞳も友達少ないよね」

「うん。でも、私には心から語り合えるメル友がいるから」

「その人が親友」

「うん。まだ会ったこともないけど、多分心の友」

瞳が小瓶を見せてくれたのは、お互いを「啓太」、「瞳」と呼び合えるようになった頃だろうか。

「私は、永遠に失くしたくないものを見つけて、それを失くした時にこれを使うの」

その言葉は静寂に包まれた図書室に、静かながらも重く響いた。

「それの中身は何なの」

僕は恐る恐る聞いた。

「あなたと別れる時になればわかるわ」

彼女は、少しばかり暗い表情で答えて、すぐにいつもの表情に戻り。

「そんな話はやめて、ねえあの本読んだ？」

「うん、図書室でも買うつもりだよ」

いつもどおりの二人に戻った。

二人はだんだん打ち解けあい、本以外に将来のことも話すようになっていた。

「僕は、世界を感動させるような作家になりたいんだ」

「素敵な夢ね」

「瞳の夢は？」

「私は批評家。古今東西の文学を研究してみたいの。でも、もうひとつあるの」

「なに？」

「お嫁さん。啓太みたいな人のお嫁さんになりたいの」

「なに、馬鹿なことを言っているんだ」

これが、本気だとこの時点で、僕は気付いていなかった。

気付いていたら、また別の未来が待っていただろう。

彼女の様子がおかしくなり始めたのは、受験を控えた夏ごろからだろうか。

「啓太、私のことを見てくれない」

「今年は受験だから、ちょっとは勉強もしないといけないし」

「そんなこと、いつも他の女の子を見ている」

「瞳は難関校を目指しているから、ナーヴァスになっているだけだろ」

「そんなことない」

「どっちにしても、今は勉強をしなくちゃ」

図書室での時間、二人での帰り道は続いてきたが、だんだんぎすぎすしてきた。

夏休みに入ると、どちらも進学対策の塾の夏期講座に通い始め、夏休みの初めこそ会う回数も減ってきていたが、それでも週に2度は会っていたが、8月には会わないようになっていた。

迎えた新学期、瞳を見るなり、僕はびっくりした。

瞳が痩せて、綺麗な長い髪もぼさぼさに変わり果てていた。

もともと、細い瞳だったが、その痩せ方は異常だった。

そして、どちらともなく二人で会うことも自然となくなった。

それでも、僕は瞳が図書室などを来たときは声を掛けたりしたが、瞳は無視するかのようにならぬように一向に僕を相手にせず、本だけを見つめていた。

むしろ、本の中に理想を見つけ出そうとしているようだった。

そして、事件は木々が紅葉になりかけた頃に起きた。

その前夜、僕の携帯に瞳から、久しぶりにメールが届いた。

内容は、「永遠なんてないのね」の一言だった。

翌日、学校へ行くと門に入るなり、教師に校長室へ呼ばれ、瞳が自殺したことを知らされた。僕は、校長室のソファに教師と二人で座らされた。

「平山香さんが、昨夜自殺をしました。中沢君、親しかったね。遺書も残されていなくて、何か心あたりはあるかね」

校長に問われたが、僕は顔面蒼白になり、茫然自失の状態になった。

その後、警察の取調べなどもあったが、何も覚えていない。

香の葬式にも出なかった。あんな綺麗だった、香の死んだ顔を見たくなかっただろう。ただ、家にこもっていた。

その後、年が明けるまで、香のことを思い出すのがいやになり、学校にも行かなかった。

さすがに先生が、高校の試験の前になると家に来訪するようになってきた。

そして、香の両親が訪れた。

「香の行けなかったところ、やれなかったことやったださるのが死んだ香のためだと思って、高校にだけは行ってください」

この一言がきっかけになり、もう一度受験勉強をして、高校受験に臨んだ。

そして、香が進学を希望していた高校に合格した。

卒業式にも行かなかった。卒業アルバムにも、欄外の丸写真で僕は載っている。

でも、それ以上に香の顔見るのが苦しかったから、卒業アルバムは一度しか見なかった。

卒業アルバムを見れるようになるまでは、20年以上かかった。

そうして、僕の中学生生活は終わった。

思えば、中学生生活は瞳と過ごすことが中心だった。それだけにそれ以外のことは、何も覚えていない。

修学旅行も同級生も。

いや、瞳のことだけを思って生きていくべきだと思い込んでいたのかもしれない。

そのために、それ以外のことを忘れようとしていたのかもしれない。

第二章

高校へ入学した僕だが、同じ中学から入学した生徒はいなかったせいもあり、友達是一向にできなかった。

ただ、それが気になるほどでもなかった。

声を掛けてくる生徒もいたが、無視したわけでないが、なぜか自然と向こうから避けていった。

高校に来たのも瞳の意志を継ぐためだけのようなものだった。

しかし、なんとなく図書委員にだけは自分で立候補した。

図書室にいる時間は、瞳との時間を思い出させてくれ、いっぽう瞳のことを思い出すと喪失感もあり、複雑な心境だった。

ただ、甘い時間を思い出すことのほうが多かった。

そのせいか、部活にも入らず、放課後は自分の図書委員の当番でなくても、図書室にいることが多くなった。クラスメート達は、そんな僕を「本屋君」と呼ぶようになっていた。

この高校は、夏休みの課題が高校にもなって、図書感想文と言うものが存在した。

その課題が発表されるなり、いつもは閑散としている、図書室は人がいっぱいになった。

その日は、僕は図書委員の当番だったので、カウンターで貸し出し業務に忙殺されていた、そんな時に声を掛けてきたのが、香だった。

ショートヘアが似合う小柄で男の子みたいな女の子だった。

「啓太君、私に似合う本、何かないかな」

「どんな感じの読みたいの？」

「もちろん、ハッピーエンド」

僕は、谷川流の「涼宮ハルヒの憂鬱」を差し出した。

「なんともユニークなタイトルな本だね」

彼女は明るい表情でにこにこしながら、そう言い、借りて行った。

その時は、彼女のことをそんなに気にしなかった。

香の第一印象は、そんな感じで、とにかくバイタリティ溢れる子だった。

それだけに、いままでの僕を変えてくれるとも、その時点で感じていた。

しかし、どこか過去にひっかかりがあるのが気になっていた。

夏休み明け、昼休みに、教室でパンを自分の机で食べていると、香が声を掛けてきた。

「啓太君、薦めてくれた本面白かったよ」

この時、すぐに彼女のことを思い出せなかった。

「啓太君、私のこと覚えていないのかな？というか、クラスメートなんだけど」

そういいながら、香は「涼宮ハルヒの憂鬱」を差し出してきた。

やっと、夏休み前のことを思い出した。

「ああ、君か、そういえばクラスメートだったの？」

「もう三ヶ月も一緒に教室で勉学に勤しんでいるんだけどな、私って、そんなに存在感薄い？」

「そんなことないと思うよ、充分かわいいし。ただ、僕があまり周りのことに興味がなかったからだけだと思うよ」

「お世辞はいいわ。でもよかった」

後で、同級生に聞いたら、香は結構、男子生徒の間では人気があったらしい。

「この続きがあるって聞いたんだけど、図書室には置いてあるの？」

「あるよ。よかったら放課後、図書室に寄りなよ、取って置くから」

「ありがとう、じゃあ放課後」

昼休みの終わりを告げる予鈴がなり、香は席に戻って行った。

放課後、図書室に一番初めに来た来館者は、香だった。

「啓太君、続きを早く」

「まあ、待って」

そんな感じで、いつも香は僕をリードするようところがあつたが、不思議と不快感はなかった。

むしろ、その活発さは心地よかった。

リードされることにも快感すら覚えた。

瞳とは正反対のタイプだった。

僕は、「涼宮ハルヒの溜息」をカウンターの上に出した。

「全部で10巻あるけど、他は借りられているから、今日はこれだけで我慢して」

「うん、わかった」

香は少し惜しそうな顔をしながら、本を受け取った。

「ところで、啓太君は部活はやっていないの？」

「あんまり、やる気がないから」

図書カードを見て、香の名前を確認してから聞いた。

「ところで松岡さんは、何か部活をやっているの？」

「うん、体操部。私のレオタード姿、興味ない？」

「いや、ないよ」

「そう残念。これでも、結構かわいいと思っているんだけどな。そうだ、今度練習を見に来てよ」

「じゃ、時間があつたら」

「もう、部活の時間だから。じゃあね、啓太君」

そう言って、香は図書室を去っていった。

なんとも騒がしい娘だなと思ったけど、不思議と悪い印象は抱かなかった。

数日後、放課後、僕が誰もいない図書室で読書をしながら、図書委員の当番で貸し出し係をやっていると、香がやって来た。

「ねえ、続きはある？」

僕は、香がそう言うてくるだろうと思って、あらかじめ返却された時、棚に置いておいた。

「はい、これで残り全部だよ」

「ありがとう」

香はうれしそうな顔をしながら、図書カードに名前を書いていた。

まるで子供のような感じだった。

「ねえ、そういえば私の練習、まだ見に来ていないじゃない」

「まあ」

「じゃ、今日これから来なさい」

「いや、今日は図書委員があるから」

「じゃ、終わるまで待っている」

「それもなあ」

「いいの、私のレオタード姿見てもらいたいの」

僕は、どうしたら、どこから、そんな言葉がいったい出てくるのだろうと思ったが。

「わかった、図書室を閉館したら、体育館に行くよ」

「よろしい」

そう言うと、満足気な表情をしながら、香は図書室を後にしていった。

図書室の閉館の時間がやって来た。

香と約束した手前、体育館へ行かないわけには行かない。

図書カードを片付けたり、鍵を職員室に戻したりした後、体育館へ向かった。

もう陽は暮れていた。

香は一人で、リボンをやっていた。

その姿は綺麗で、僕は黙り込んで見入ってしまった。

香も一人でリボンを続けていたが、曲が終わると、僕に気付いたようだった。

「どうしたの、そんな顔して。私に惚れた、啓太君？」

「いや、あまり綺麗だったから」

「まあ、いいわ、啓太君のこと待っていたら、最後になったから、片付け手伝ってくれる」

「うん、わかった」

「じゃ、マットを倉庫にしまいましょう」

そう言って、二人でマットを倉庫に運んだ。

倉庫の奥にマットを置く時、後ろのボール入れにひっかかり、勢いがあまり、香に抱きついてしまった。

香は一瞬、顔を赤くしたが、その次に、突然、僕にキスしてきた。

「啓太君、好きなの」

僕は、何も言えず黙り込んでしまった。

でも、その次に冷静になって。

「なんで、僕なの」

「最初に会ったときから。なんで私が本屋君って呼ばなかったか気付かなかった」

「そういえば」

「そういうこと」

今度はお互いに抱きしめあいながらキスをした。

そうして、僕らは付き合うようになった。

そうすると、次第に瞳のことを忘れられるようになったせいか、友達もでき、所謂明るい学園生活を送るようになった。

香が部活の時は、僕は香の部活が終わるまで待って一緒に駅まで帰るようになった。

もちろん、僕が図書当番の時は、図書室に閉館まで二人でいた。

香が一方的に話し、僕は相槌をうつばかりだったが、なんとも充実したひと時を過ごせた。

たまには、体育館に香の体操部の練習を見に行くようにもなった。

香の演技の後、僕が拍手をすると笑顔で手を振ってくれた。

香のリボンを見るのは、好きだった。

僕には天使の様に見えた。

大会へも応援に行った。

残念ながら入賞は逃したが、演技の後、僕の方を向いてウィンクをしてくれた。

香は、瞳とは正反対の性格だったが、僕にとって一緒に居ると落ち着いた。
瞳と一緒にいた時は、どこか脆いガラス細工を扱うように過ごしていたが、香と一緒に居る時は、本当の自分を全部さらけ出してもいいような気がした。
なんだか、本当の自分に戻っていくような気がした。
でも、本当の自分がどんな感じなのかはわからなかった。

もともと、僕は人付き合いが好きなほうでないし、話もするほうでない。
テレビもニュース以外見ないし、ゲームも付き合いでするぐらいだ。
そんな僕だけに、快活な香には惹かれていった。
香に、私のどこが好きなのかを問われた時には、そう答えた。
だけど、瞳は僕のどこが好きになったかは、いつ聞いても教えてくれなかった。

そして、外で一緒にデートしたりするようにもなった。
香はいつもボーイッシュなファッションだった。
あまりスカートをはかず、ジーンズにブラウス、ブルゾンという感じだ。
僕も、ジーンズにTシャツの上にYシャツをはおるラフな格好の時が多かった。

いつも香がリードするような形のデートだった。
遊園地や公園が多く、映画はいつもアクション系だった。
僕は、もっとドラマが好きだが、なんだか香にあわせるのが心地よかった。
遊園地では、意外に絶叫系のマシンが苦手で、映画では泣いたりして、意外な一面もあった。
そんなところが、なんともかわいく思えた。
デートの帰りは必ず、キスをしてから別れた。

そうして、冬が訪れた。
クリスマスは一緒に僕の部屋で過ごした。
二人でプレゼント交換をして、ケーキを食べた。
クリスマスプレゼントは、僕は香にペンダントを送り、香は僕にハンカチをくれた。
ペンダントは香が好きだという、鳥をイメージしたペンダント。
香からのプレゼントは、もう少し大人になりなさいということで紳士物のハンカチだった。

大晦日は、二人で神社へ行き、二年参りをした。
神社は、込み合っていた、手をつなぎ列に並びながら、何を願いましょうかと相談していた。
「志望校合格」

「ロマンがないわね」

「じゃあ、香は」

「もっと、ロマンチックよ」

そして、二人でお賽銭を投げ入れ、拍手を打った。

しかし、最後までお願いの内容を聞いても、教えてくれなかった。

その後、二人でくじを引いた。

二人とも凶で、「近々別離が訪れるでしょう」と書いてあった。

「あんまり、よくないね」

「そんなの迷信。凶ってことはこれ以上悪いことはないから」

「まあ、そうかな」

しかし、このくじが当たるとは、この時は思わなかった。

バレンタインにはチョコをもらった。

放課後、図書室まで持ってくれた。

「他の人には内緒。これ一個だけなんだから」

香は少し照れながら、チョコを渡してくれた。

そうやって、だんだん香中心の生活になっていった。

ただ、こうして瞳のことを忘れるのも怖い気がしていた。

第三章

新学期がやって来て、またクラスメートになった。

もう、周囲も公認のカップルになっていた。

そうして、幸せな日が続いた。

瞳の三回忌までは。

この頃になると、僕も瞳に起こったことを冷静に捉えられるようになっていた。

いままで、墓前にも行っていなかったのに、瞳の母から参列してくれと言われて、断る理由もないので参列することになった。

三回忌の日、制服を着て墓地に行き、焼香をして、周囲を見渡すと中学時代の同級生が多かった。

その中に見慣れた制服を着た女の子がいたので、よく見てみると香だった。

ショックだった、なんでこの場に香がいるのか。

式が終わった後、あわてて香に近寄った。

「どうして、香がこの場にいるんだ」

「言わなかった、私と瞳はメル友だったこと」

「はじめて聞いた」

「だから、高校入る前から啓太君のこと知っていたの」

香は平然とした顔で答えている。

その後、二人で喫茶店へ行った。

喫茶店は静寂に満ちていただけに、二人の声は目立った。

「なんで、最初にそれを言ってくれなかった」

「言ったら、私と付き合った」

「付き合わなかったと思う」

曖昧な言い方になる。

「でも、最初にモーションかけて来たのは君からだろ」

「だからよ。私が瞳と友達だと知っていたら、避けていたでしょ」

「理由はなんだ」

「うーん、瞳の恋人がどんな人か知りたかったし、復讐してやろうとも思ったわ」

「復讐って？」

「瞳を振った本人を、今度は逆に振るの」

「じゃあ、僕たちは」

「そう今日でおしまい。それなり、あなたと一緒にいるの楽しかった。瞳が好きになった理由もわかったわよ。純粹で、気取らなくて、やさしくて。でも、それが時には残酷なことになるのよ」

「ってことは」

「当たり前よ、今日でじゃあね」

そう言い、香は伝票を持って、喫茶店を出て行った。

そういえば、瞳にメル友が居たことは聞いたことがあった、けどあんまり深く追求することはなかった。

相手が女の子と聞いていたせいだろう。

それだけにまさか、メル友が香だとは思ってしなかった。

香は、僕と同じで友達付き合いが苦手で、メル友は大事にしていると聞いていた。

ある時、メル友に僕とのことを書いているとも言っていた。

2時間はそうしていただろうか。

僕は、ぼーとしながら窓の外を眺めていた。

香は、僕の大事な人だと思っていたのに。

香にとっても、僕は大事な人だと思っていた。

なんで、僕の大事な人は去っていくのか。

全ては、瞳との付き合いから始まったのか。

喫茶店は閉店になり、僕は夜の町をあてどなく歩いた。

「君、まだ高校生だよ、こんな時間に何をしているんだ」

警官に声をかけられて、はじめて冷静さを取り戻した。

「予備校の帰りです。これから家に帰ります」

「高校生がこんな時間まで、繁華街にいたらいかんよ」

そう言われ、あわてて駅へ向かった。

家に帰るなり、香とっしょに撮った写真やプリクラを燃やし、全てを終えた時には陽が昇っていた。

なんともむなしかった、あの充実した時間は、全て騙されていたと思うと、やりきれない思いが溢れてきた。

もちろん、翌日は学校を休んだ。

翌日だけでなく、一週間ぐらい部屋に閉じこもった。

寝ても、瞳と香の夢ばかり見て、まったく寝た気がしなかった。

見る夢は、瞳と香から、責め立てられてられる夢ばかりだ。

瞳の夢は、いつも恨みのようなものだった。

「なんで、私のことだけを見ていてくれないの」

香の夢は、僕を傷つけるようなものばかりだった。

「あなたなんて、本当は好きじゃなかったの」

「瞳を裏切った罰よ」

夜中に目が醒めると、目の前に香がいるような気がした。

そのうち担任の先生から電話が来たので、学校へいやいやながら登校した。

教室へ着くなり、そこで、信じられないことがあった。

香の席が空席になっていたことだった。

同級生に聞いてみた。

「1週間前に親の都合で留学することになったらしいぜ」

1週間前、瞳の法事の翌日だ。

そうか、そのためだけに香はこの高校に入り、僕に近づいてきたのか。

全てを悟った気がした。

その後は、入学当初の僕に戻り、周囲とも付き合わず、学校が終わるとすぐ帰るようになった。

図書室も香のことを思い出すようで、近寄りたくなかった。

本も、瞳のことを思い出すようで、読むことがなくなった。

家に帰っても、テレビでつまらないバラエティとニュースを見るだけの生活だった。

それでも、とりあえず、高校はなんとなく卒業した。

今度は卒業式にも出た。

しかし、大学は滑り、予備校通いが始まった。

それでも、僕の気持ちは傷付いたままだった、香に騙されたショックから立ち直ったのは、大学に入学してからだ。

第四章

僕は、一浪して中堅大学の文学部に入学した。専攻は現代日本文学。これを選んだのは、なんとなく瞳と一緒に交えた中学時代の文学談義の影響だと思う。

この頃になると、再び読書もするようになり、大学の図書館は蔵書数があるので、いろいろな本を読み、図書館へ通うようになっていた。

大学では文芸サークルに入り、毎日文学談義などをして、新しい彼女も出来て、この頃になると瞳、香のことも思い出さなくなっていた。

コンパなんかにもよく参加していた。

アルバイトも始めた。

当然、書店だ。

最初はレジ打ちから始まり、だんだん発注の相談なんかも受けるようになっていた。

そこでは、社員とよく本の話しをしていた。

充実した日々だった。

でも、彼女には時々言われた。

「啓太、いつも私のことを見ていない。誰か、他に好きな人いるでしょ」

そういう時は、笑顔で。

「そんなことはないよ、浮気なんかしていないよ」

そう言い、ごまかしたが、そう言われると、心のどこかで忘れられない女性がいる気もしていた。

その頃になると、僕も運転免許を取得したので、ドライブへ行ったりもした。

クラブやライブなんかも一緒に行った。

興味のないアーティストのライブに付き合わせられるのは苦痛だったが、それでも彼女の笑顔のためと思い付き合った。

ドライブは、僕は海が好きなので、海へ行き砂浜で戯れていた。

彼女は、体がしおっぽくなると嫌がっていたが、広い海を見ると、なにもかも忘れる気がしていた。

いつも、朝から出かけ、昼食を食べ、陽が沈むものを見て、彼女の家まで送るのが定番だった。

夏にはサークルの合宿で、山登りなどをした。

大学入る前の僕には考えられなかったことだ。

そして、酒も飲むようになっていた。

でも、いつも酒を飲むと、過去のことを思い出し、あまり好きではなかった。

彼女は、弁当などを作ってくれる、実に家庭的な女性だった。

よく昼食は、校庭の木陰で彼女の作ってくれた弁当を食べた。

いつも和風で、ちゃんと出汁も取ってある丁寧な作りの弁当だった。

身長は女性としては普通、髪は肩まで伸ばしていて、音楽なんかの趣味も普通だった。

付き合い始めたきっかけも、なんとなくサークルのコンパで帰り道が一緒に、それが何度か続きいつの間にか二人だけでも会うようになった。

その彼女とは、1年ぐらい続いただろうか、なぜだかわからないが彼女から、忽然と電話もメールもしなくなってきた、自然と仲は消滅した。

ただ、最後に。

「あなたは、いつも私と誰かを比べている」

そういう風に言われたことだけは覚えている。

その後、彼女は大学を退学して、実家に戻って、結婚したと聞いた。

なんでも、田舎の旧家で、大学に入ったのも、婿を探すまでの時間潰しみたいなものだったらしい。

サークルのみんなも僕たちが別れたこと、彼女が結婚したことには驚いていた。

てっきり、僕たちの仲は一生続くかのように見えていたらしい。

その後、彼女から一回だけ、手紙が送られてきた。

「子供ができました。今、幸せの絶頂期です。でも、時々あなたと一緒に海をドライブしたことを思い出します。もう、あんな時間は来ないのですね。あなたは、いつも理想の女性を追い求めていたみたいですけど、早く見つかるといいですね」

とりあえず、彼女が幸せに過ごせていて安心した。

しかし、僕は、どうしていつも理想の女性を追っているかのように見えていたのかが気になった。

彼女と別れた後は、特定の女性とは付き合わなかった、特に気になる子がいたわけでもないし、

声を掛けてくる子もいたが、なんとなく長続きしない気がしたので、2回ぐらいデートをするだけで、それだけだった。

どうも、3人続けて不幸な破局を迎えて、女性への不信感が芽生えていたのかもしれない。

それ以外は、ごく普通のキャンパスライフだった。講義を受け、サークルに参加して、高校時代より明るく振舞っていた。

成績もいいほうの部類にいた。

いま思うと、明るく振舞っていたのではない、振舞おうとしていただけなのかもしれない。たしかに今アルバムを見ると、笑顔を無理に作っているような写真が多い。

それ以外の空いている時間は、図書館によく居た。

本を読むだけでなく、レポートを書いたりする時もあった。

それでも、かなり通っていたせいか、司書に名前を覚えられていた。

そうやって、2年間は何もなく、ごくごく普通のキャンパスライフを送っていた。

そうして3年に無事進級した。

第五章

それは突然だった。

3年の春だった、キャンパスで香に会った。

講義で、部屋が偶然隣の席になった。

すっかり、大人びた格好をしており、短かった髪も伸びていた。

高校時代とは、すっかり変わっていた。

最初は、ショックで何も話しかけられなかったが、香から話しかけてきた。

「お久しぶり、元気」

「ああ、元気だよ。なんとか、生きている」

「そう、よかったわ」

「そっちこそ、どうなんだ」

小声で話してつもりだったが、教室中に響いていたらしく教授に注意された。

「講義の後カフェテリアで待っているわ」

そう書かれたメモを渡された。

しかし、なんとも落ちつかなかったのか、いつもはまめにノートをとる僕だが、この日の講義のノートは真っ白だった。

カフェテリアへ着くと、既に香がいた。

香は、カフェラテを飲んでいた。

僕も、同じものをオーダーした。

「啓太君でいいのかしら、それとも中沢君のほうがいい？」

「どっちでもいい」

「じゃあ、啓太君でいいや」

「ところで、なんであの日に転校したんだ？」

「偶然よ、たまたま父の海外転勤が決まっていたのだけど、法事にだけは出たくて、あの日まで日本に居たの」

「ショックだったんだぞ、僕にとって」

「わかっているわ、それより私あやまらなくちゃいけないことがあるの」

「あやまらなくちゃいけないこと？」

「今度の日曜日空いてる？」

「うん」

「じゃあ、うちに来て」

「あやまらなきゃいけないことって？」

「それは、ちょっと話が長くなるわ」

日曜日、香の家へ訪問した。

香の部屋は、シンプルな白を基調としたデザインでまとめられていた。

ぬいぐるみなどなく、いかにも香らしい部屋だ。

なぜか、香は緊張していた。

香は一枚の写真を引き出しから、出して来た。

遠足かなにかの集合写真だった。

「この写真、覚えている」

「いや、覚えていない」

「啓太君、小学校3年の時、仙台の小学校にいたの覚えている？」

「小学校は都合3度転校したけど、たしかその時期は仙台だったと思う」

「私と瞳が小学校2年からメル友だったのは、話した？」

「いや、はじめて聞く」

「もう一回、この写真を見て、ここの男の子、啓太君、そして隅の女の子が私」

「ってことは」

「そう既に小学生の時に会っていたの。って言っても、この学校三ヶ月ぐらいしかいなかったから」

「そんなことが」

「これからが本題、引越しの時、昔の瞳とのやりとりしたメールを見たの、そうしたら私、その頃、啓太君のことばかり書いてあったの」

「つまりは」

「その頃から、啓太君が好きだったのは私」

なかば、あきらめ顔で香は言い放った。

「ついでに瞳も、このメール読んで、こんな人と付き合ってみたくて書いてあったわ」

「そんなことがあったのか」

「そう、つまり瞳の恋人を横取りしたのは私」

「瞳もそのことに気付いて、あんなことになったのね」

香は涙ながらに、ぼそぼそと言う。

「そんなことはない、気にするな、人生の偶然だよ」

そうすると、香は引き出しから、もう1枚ぼろぼろの手紙を出して来た。

そこには、「香ちゃんへ」と書いてあった。

「僕は、香ちゃんが大好きです。将来、結婚してください。啓太」と書いてあった。

「啓太君は、もう忘れてるよね。こんな手紙、私に出していたのよ」

「つまり、僕がいつも理想としていた女性は香だったということか」

「そう。啓太君は、瞳を見ているつもりでも、実は私のことを忘れられないでいたの」

僕も、だんだんと記憶が鮮明になっていく。

小学校で、香と過ごした三ヶ月間。確かに、当時は好きとも言えるような感情を持っていたこと。

「でも私、卒業までいなかったから、写真も少なかったし、まさかこんなことがあるなんて思ってもいなかった」

「僕だって忘れていた」

香は厳しい表情になった。

「もうひとつ、言い忘れてことがあるの」

僕は黙って聞いた。

「瞳が自殺に使った、青酸カリ。あれを瞳に渡したのは、私なの。父が化学工場に勤めていて、工場に行った時、綺麗だなと思い持って帰ってきて、瞳に贈ったのの私だったの」

そして、香は僕に抱きかかってくる。

「そう、瞳にとっての永遠を奪ったのは私たち二人なの」

涙が僕の肩にこぼれる。

いつもの強気な香じゃない、弱りきっている。

抱きしめて、顔を見つめ、そしてキスした。

「僕にとっての永遠に大切な女性は香だけだよ」

そう言うと、香は涙を拭きながら、僕に向かって。

「ありがとう、もう一生離さないで、私、啓太のことが本当は大好き」

翌日の深夜、香の両親から電話があった。

「香が、青酸カリで自殺しました。危篤状態です。遺書に啓太さんのことが書いてあったので来てもらえませんか」

僕は、着替えて慌てて病院へ向かった。

病院へ着くと、香の両親が僕のところへ来た。

病院は、独特の匂いと喧騒に包まれていた。

「高校以来です、お久しぶりです。香の容態はどうですか？」

「一命は取り留めました、もうすぐ意識が回復すると思います」

それを聞いて、僕は安心して、ベンチへ腰掛けて、香の回復を待つことにした。

一晩経った後、香は回復した。

香と両親が話した後、僕は一人で病室へ入るように香の両親に頼まれた。

病室は個室で花が生けられていたが、寂しい雰囲気だった。

「香、大丈夫か」

「啓太、ごめんね。どうしても私、瞳への懺悔がしたかったの」

「もう、いいじゃないか。これからは瞳の分まで生きよう」

「ありがとう、啓太」

香は涙を流していた。

それを僕はハンカチでぬぐってあげた。

「それ、私が高校時代にクリスマスにあげたプレゼント。まだ、使っていたの？」

「ああ、なんとなく捨てられなくて。写真とかは燃やしちゃったけど」

「あの時は、私が酷かったわ」

「いいさ、これからまた二人で思い出を作ろう」

一カ月後に香は退院した。

退院には、花束を持って迎えに行った。

いつもの香の笑顔が戻りかけていて、少し安心した。

その後、香の家で話をした。

「これから、私たちどうすればいいの」

「また、高校時代に戻ればいいよ」

「戻れるかしら」

「戻れるよ」

そうして、二人は高校の時にように一緒に過ごす時間が増えた。

もちろん、サークルなども続けていたが、休日になると、ほとんど香と過ごし、昼食なんかもほぼ毎日一緒に食べていた。

まるで、高校時代に戻ったようだった。

香も、高校時代に戻ったように、僕をリードしていくようになった。

デートも高校時代のような感じになっていったが、この頃は僕も見たい映画がある時は、ど

れを見るかで、二人で喧嘩することもあった。

でも、最後には香に負けた。

徐々にではあるが、二人の関係も大人の関係になっていた。

香も、高校時代と比べると言葉遣いとか格好も女らしくなり、たまには弁当を作ってきてくれるようになったりもした。

僕もスーツを着てインターンに参加したり、就職活動を開始したりした。

お互い段々大人になっていった。

僕は、出版業界にターゲットを定めて就職活動をしていたが、なかなか内定が出なかった。

もともと人気のある業界だけにどこも倍率が高かった。

不合格通知ばかり来たが、そんな時も香の励ましでなんとかがんばれた。

そして、何とか中堅の出版プロダクションから内定をもらったのは、4年の夏にもなろうとする時期だった。

あとで聞いた話だが、香も高校を転校していった後、何人かの男性と付き合いはしたものの、どうしても、僕と比較をしてしまい、長く続いたことはなかったと言っていた。

それを聞いたのは、10年以上経った後だが。

そして、僕の就職が内定した時、一大決心をした。

そうだ結婚だ。

アルバイトで貯めた貯金で宝石店へ行き、一番安いエンゲージリングを購入した。

本当は、もっと高いものを買いたかったが、とにかくプロポーズを1日でも早くしたかった。

香を食事に誘い、とりあえず学校のことなんか話していた。

話が止んだ時、おもむろにポケットからエンゲージリングを出し、プロポーズをした。

「香、僕と結婚をしてくれ」

香は涙ながらにうれしそうな顔をして、エンゲージリングを受け取ってくれた。

「こんな私と一生を過ごすのよ」

「僕にとっての理想の女性は君だから」

「私、こんなうれしいこと生まれてはじめて」

学生結婚で周囲からの反対も多かった。

僕の両親からも反対された。

「就職して落ち着いてからでいいじゃない」

しかし、もう既に香を離せなくなっていて、香なしでは生きていけない生活になっていたのです、でも僕の気持ちは揺るがなかった。

香の両親にも、何度も訪ね、本当にいいのかと何度も尋ねられたが、僕の意志は揺るがなかった。

最後には、香の両親が根負けして、香の両親にお辞儀をされた。

「こんな不肖な娘ですが、どうぞよろしくお願いします」

「僕が一生、彼女を守ります」

そうすると、香の両親は涙ながらに、僕に握手を求めてきた。

結婚式はやらず、籍だけを入れて、ドレス姿の記念写真を撮影だけをした。

そして、その写真が出来たとき、写真を持って、二人で瞳の墓前へ行った。

「瞳、君のことは一生忘れないから」

「あなたの分も啓太を愛すわ」

紅葉の舞う季節だった。

エピローグ

結婚して3年後、子供が生まれた。

粒のような女の子だった。

僕も社会人として、薄給だが、出版プロダクションで編集をやっていた。

本作りに関われる情熱だけで仕事をしていたようなものだ。

両親も初孫が出来大喜びし、もちろん僕も喜んだ。

名前は二人で考えるとことにしたが、自然と「瞳」に決まった。

新たに生まれ変わった「瞳」。

今度は、幸せな人生を歩んでもらいたい。

そして、永遠に瞳を愛してくれる人と出会って欲しい。

そして、僕たちの瞳も中学生になっていた。

僕は、5年前に会社を退職して作家になった。

香は最初に入社した商社の営業でめきめき仕事をしていき、ヒット商品をいくつか出し、それが外資系商社に目にとまりヘッドハンティングされて、いまやキャリアウーマンとして海外と往復する日々だった。

そんな二人だったが、不思議とすれ違いはなかった。

僕が億劫だから、メールや電話もほとんどしなかったが、香が家に戻り、二人になれば、高校生時代の二人に戻っていた。

作家と言っても、少年少女向けの小説ばかり書いていて、ヒット作もない、売れない作家だった。

家計の足りない分は、キャリアウーマンの香に養ってもらっているようなものだ。

いま住んでいるマンションの名義もローンも香のものだった。

高校時代と変わらずリードされっぱなしの生活だった。

ただひとつ変わったことがある。

結婚当初は二人で分担していた炊事洗濯だが、僕が作家になった途端、完全に僕が主夫になってしまった。

別にそれを不満があるわけでもないし、香もたまに帰ってくれば料理ぐらいはした。

両家の両親にはあきれられていたが、とは言え、香は僕のことを分かってくれているようで、半ばあきらめモードだった。

僕は、中学、高校時代の思い出のような、淡いラブロマンスばかりを書いていた。

それでも、ファンはいるようで、たまにファンレターなんか来て、香に見せると、大喜びしてくれた。

瞳はいつも本棚の前で本を読んでいた。

僕の蔵書はゆうに1000冊を超えていた。

たまに、僕の小説だと言うファンの女の子を連れて来たりもした。

その子たちは、なんだか、昔の瞳を見ているようだった。

それを、香に話すと、「あなたの本で勇気を持ってくれる女の子がいるならいいじゃない」

そう言って、嬉しそうになっていた。

ある日曜日のこと、瞳が同級生だと言う男の子を連れてきた。

「お父さんの蔵書に興味があるって」

「何か面白い本を紹介してください」

「そうか、古い本だけどこの本が僕たちの結婚のきっかけなんだよ」

そう言い、「涼宮ハルヒの憂鬱」を二人の前に出していた。

僕は二人を見て。

「どんなきっかけで友達になったんだい」

「僕が図書委員で、彼女がよく図書室に来ていた縁です」

その時、20年前の僕と瞳と、そして香がいるような感じがした。

そして、この二人の未来が見えた気がした。

その秋、香と二人で10数年ぶりに瞳の墓前へ訪れた。

香は墓標へ向かって、話しかけている。

「啓太さんとは幸せです。瞳もあなたのような子になってきているわ。でも、きっとあなたが掴めなかった幸せを得るから、それで安心してちょうだい」

「瞳、この年になって、やっとあの時の君の気持ちがわかってきたよ。君のような少女が喜ぶような本を書いて行きたいと思う」

そして、花束と僕の最新刊「白い結晶と彼女」をお供えした。

あとがき

ここを読んでいると言う事は物語を最後まで読んでいただけただけでしょうか？
それだと嬉しいです。

もともと、この作品は4年ぐらい前の不眠症のひどい時に眠れないのを紛らわせるために書いた物です。

今回、パブーを試したくて、コンクール審査中とかではないもので、適当な量があると言う事で引っ張り出しました。

シナリオ作法的に言えば、自分でも気になっている部分はあります。

その辺はご容赦を。

とは言え、もしご感想がありましたら、パブーのコメントまたはメール、ツイッターに寄せていただければ。

次回作は、これのダウンロードが10を超えたら掲載します。

次回は短編の予定です。

卯月京

twitter: @uduki_kyo